

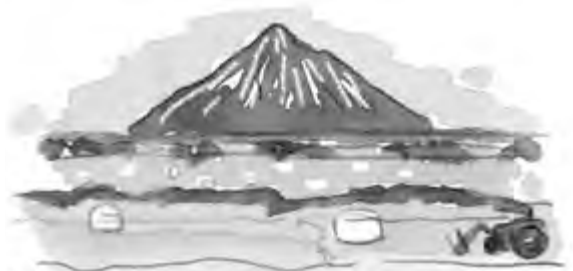
「美味しいミルクの 生まれるところ」

第2回

豊富町、自然と酪農が共に生きる町へ。



絵と文：新岡 薫 / エトピア社



宗谷管内の豊富町。その一部は利尻礼文サロベツ国立公園。日本三大湿地のひとつサロベツ湿原は、希少な野鳥や動物の生息地で世界的に重要な湿地としてラムサール条約に登録されています。

湿原も酪農も守りたい。国立公園と隣り合わせの豊富町

北海道の西海岸に沿うオロロンラインを抜け、利尻富士を望むサロベツ湿原に到着。湿原センターから木道に出ると原野の大パノラマ！ 何度来ても圧倒される風景です。ここは日本最北の国立公園を有する豊富町。周囲には高層湿原が残され、泥炭地、湿地、林、牧草地と多様な環境が織りなしています。重要な自然環境である湿原に農地が隣接したサロベツ地区で、牧場や環境保全に関わる方々のお話を聞きました。

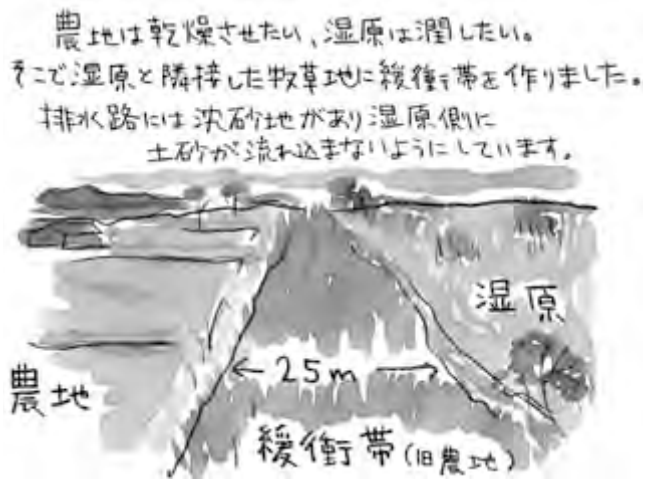
かつて、サロベツ川の蛇行で湿原が形成されたという原野。明治時代から入植し、戦後から大規模な開拓が本格的にはじまりました。酪農の発展や土地の整備は人々の生活を支えましたが、その活動により湿原は減少。さらに泥炭地特有の地盤沈下によって、農地も機能が低下。雨が降れば川から水があふれ、牧草の収穫量を下げます。「春先は雪解け水に浸かるから、昔の農家は舟を持っていたんだよ」なんてエピソードも。かたや、水をたたえることで生態系が保全されている湿地には乾燥化の心配が。

そこで平成17（2005）年度から「上サロベツ自然再生協議会」がスタート。行政と地域住民、学識経験者などが一体となって湿原の保全と酪農の振興、地域づくりを目指し、さまざまな提案がされています。議論を重ねるうちに「酪農の振興のためにはサロベツ湿原という恵まれた自然環境のもとで、安全に生産されている牛乳だと消費者に認めてもらわねば」という考えが広まっていきました。

自然と共生していく提案のひとつが緩衝帯。農地の水を抜くと湿原の水まで抜けてしまう。湿原の水位を保つためには地下水が影響し合わない幅のある緩衝帯を農地に作りたい。実現のためには関係者の理解が欠かせません。調査と説明を重ね、13戸の農家さんに土地の提供をしてもらいました。完成後ははつきりとした効果が見られ、牧草地側、湿原側ともに目標値になりました。実際に緩衝帯を見学するとその範囲はとても広く、地域が一体となって協力した様子が伝わってきます。今後もモニタリングを続け、この先の共存にも生かしていくそうです。



この町は先人たちが苦勞して泥炭地を開拓してきた酪農地帯。地域が一体となって、湿原と酪農の共生を目指して自然再生のために取り組んでいます。



農地は乾燥させたい、湿原は潤したい。そこで湿原と隣接した牧草地に緩衝帯を作りました。排水路には決り地があり湿原側に土砂が流れ込まないようにしています。

← 25m →

農地 湿原 緩衝帯(旧農地)



湿原があるから水も牛乳も美味しい

豊富町と聞いて温泉を思い出す方も多いのではないのでしょうか？豊富温泉の泉質は保湿効果が高く、少し石油臭がする珍しいお湯。皮膚疾患への効果が注目され、湯治目的で訪れる人も少なくありません。「本当に大好きなお湯で、今後は美容に興味のある方に向けた旅の形も提案していきたいです」とお話ししてくれたのは川島旅館の女将、松本美穂さん。

豊富温泉で一番古くから開業している川島旅館は美穂さんが三代目。夫の康宏さんは三代目湯守で板長、祖母である先代からの跡継ぎです。川島旅館といえばミルクプリンやバターも人気。「夕食時に出したプリンが評判になって販売するようになりました」。乳製品を作るようになったきっかけは酪農地帯の悲しい出来事でした。「まだ先代のおばあちゃんが切り盛りしていたころ、夫が牛乳の廃棄の様子をニュースで見てショックを受けたんです」。生産過剰になった牛乳を乳価の安定のために供給調整で廃棄されたことを知り、旅館でも何かもっと牛乳を使ったものを作れないかと試したのが牛乳プリンでした。

今では全国の物産展やオンラインでも販売されているプリンとバター。その原材料はもちろん豊富の牛乳です。「豊富町の牧草はミネラルたっぷりの最高の牧草だと思っています。美味しい牧草で育った牛たちが

ら搾る、牛乳本来の美味しさを堪能してもらいたいのので防腐剤は使っていません」。自慢のプリンはトロツとして、まるで牛乳を食べているような風味でした。

「美味しい豊富牛乳が生産できているのは、かつて大きな開発があったから。そんな各地で農地を広げていった時代、湿原を保護しなければならぬと保全活動の基礎計画を作ったのが辻井先生でした」。辻井先生とは湿原研究50年の第一人者、故辻井達一先生。サロベツ原野を舞台に湿原の利用と保護を調査研究し続け、美穂さんとも交流があったそうです。「湿原には何もないと言う地元の人もありますが、辻井先生に言わせると苔の博物館。とっても貴重な場所だから、魅力が再認識されるときが来るよとおっしゃっていました」。確かに近年、スポンジのように保水力の高いミズゴケが雨水の調整につながるなど、湿原の重要性に注目が集まっています。「今お出ししている水は町の水道水なんです、豊富は水も美味しいと思うんです」。水が美味しいから、育つ牧草も、牛乳も美味しくなるのかもしれないと、自然再生事業の話を出しました。

「温泉入っていきますか？」と言ってくれた美穂さん。平成28（2016）年のリニューアルで建て替えられた旅館はモダンで居心地の良い空間。はい！今度ゆ〜っくり宿泊に来ます！

新岡 薫／エトブン社

札幌出身のイラストレーター。北海道の野生動物を中心に絵と文を描くことをライフワークとし、取材旅を通じたイラストコラムを制作している。著作にコミックエッセイ「狩りガールが旅するおいしいのはじまり（講談社）」。etobunsha.com